

---

# レディ

森かえで

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レディ

### 【Nコード】

N1049B

### 【作者名】

森かえで

### 【あらすじ】

アルバイト先のコーヒーショップには、ある女性がいつも来店する。あの人の存在に、僕はいつも感動をして、そして飲み込まれている。

「あっ」

目の前の女性客がバッグの中を覗き込みながら、目を見開かせた。

「さ、財布、ないん…」

「え」

「ですけど…」

顔の角度を変えずにこちらを向くので、上目を遣う状態になる。

両側に分けた前髪の影から、長いまつげに縁取られた右目が顕れる。どうしましよう、と僕を見ている。自分から目を逸らせないでいると、彼女からバッグに視線を戻し、中を探したり、それから自分の座っていたカウンター席まで戻っていつて周りの床なんかを見に行ったりしていた。

彼女は僕の方に向き直り毛皮のコートを羽織りながら

「今から、持って来ていいですか」

家近いんで、とキャッシュカウンターまで足早に戻って来る。カツカツカツ、ヒールの音が響く。

代金は大した額ではなかった。店長や他の店員の対応を思い返す。

「あ、でしたら、次回にお支払いして頂いて」

「え、いいんですか」

「はい」

表情を険しくさせたまま固まっていた彼女の顔が緩んだ。暖かい照明にえくぼがくつきりと映し出された。

ずっと、この女性の姿は視界の隅に捕えていた。

いや捕えられずにはいられなかったと言った方がいいのか、とにかくこの人の存在は店の中で際立っていた。それもそのはずなのかもしれない、いつも丈の短い原色のスカートにピンヒール、緩くパーマをかけた茶髪をラメで輝かせ化粧は濃く、シアトル系コーヒース

ヨップには傍目にも似合わない。僕の周りの店員は、絶対に水商売をやっている人だとスタツフルームで噂している。

ただ、僕の目を魅きつけたのは、そんな出で立ちに由来する存在感ではなかった。

いつも午後四時に来店し、カウンター席の、奥から二番目の席に座って一番苦いエスプレッソを飲む。あの席は唯一日光が当たる席だということを、日が経って知った。あのエスプレッソが店の出すコーヒーの中で一番色が濃ゆいということも。

テーブルに肘をつきカップに唇を近づけ、一瞬目を細めてからまず一口すすする。残されたカップには、くつきりルージュの跡が一つ、あらゆる数字や手順のルール。なぜこれだけ型式的なのだろう、とも思う。けれどそれがまた、彼女の存在を大きくしている。

この人が店の中でこんな風に過ごしていると、いつも不思議な力を感じる。まるで彼女が店のことを裏まで見通していて、店の中のすべてのものの呼吸を手にしているような、奇妙な錯覚に陥る。

けれど僕は、こんな感覚をむしろふさわしいと感じている。そして、自分が彼女のルールに規定され始めているのも気付いている。しかしそのことも全く不快に感じないのだ。

今日は普段とは違うことがたくさんあったけれど、それでも、彼女の存在感は大きいままだった。彼女がこの店にいたことが、一番しっくりとくるのだと思えた。

柔らかな笑顔を盗み見る。ツケのメモを書く僕の手元を見ている。相変わらずラメがきらきらと輝いている。

「外までお送りしましょうか」

本当に後で思い返すと不思議なことなのだが、こんな突拍子もないことが口を突いて飛び出した。コーヒーショップの店員がそんなことを言ったものだから、少し驚いた風だったが

「大丈夫です」

と、きりりとした笑顔で笑った。真っ赤な唇から白い歯がこぼれた。

しかし、ドアの方に向かったときに、革バッグを肩に掛け直した。いつもの手順に戻って行く。

「ありがとうございます」

おじきしながら、ヒールの音が響きわたるのを聞いている。そう、三歩歩いてから、左手でドアを開けるのだ。

次の客に視線を移す。ドアの閉まる音が聞こえて、十一月の、けれどまだ暖かい風。右の頬をなでる。店の中に染み渡る。

だから、こうして右頬に風を感じるたびに、少し寂しい気持ちになってしまう。

僕は大きく息を吸って、再び仕事に意識を向け直した。

(後書き)

あまりコピーショップの事情は知らないもので、リアリティの至らなさお許しください。しかし… 料金は先に払いそうですね、後で思いました。  
是非感想や評価をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1049b/>

---

レディ

2010年10月10日07時34分発行